



1992年5月

ニュース

No. 26

日本工学アカデミー広報委員会

事務局：〒140 東京都品川区大井1-49-15

(住友生命大井町ビル8階)

TEL：(03) 3777-2941

FAX：(03) 3777-4941

通常総会開催さる

日本工学アカデミー第6回通常総会は、平成4年5月15日(金)14時より、千代田区丸の内1-4-6日本工業倶楽部会館2階大会堂にて開催された。

総会は、定刻14時、専務理事の司会により始められ、まず事務局長から「本日の出席正会員は55名、委任状を寄せられた正会員は275名で合計330名となり、総会は会則に示されている正会員総数(546名)の10分の1以上に達しておりますので成立いたします」と報告があり、会長の開会宣言ののち、会則5-16)により、会長が議長席に着き、議事が進められた。

議事は既に全会員に予め提示されていた、次の議案について、それぞれ専務理事の説明があって審議された。

1. 平成3年度事業報告および収支決算報告
2. 平成4年度事業計画および収支予算
3. 平成4年度日本工学アカデミー役員選出
4. その他

まず、第1番目の平成3年度事業報告および収支決算については、会長から伊藤、橋口両監事から「監査の結果適正であると認めた」との報告を受け

ていると発言があり、了承された。

第2番目の平成4年度の事業計画および予算については、桜井専務理事から本年度は特に国際活動に重点をおいている旨の説明があり了承された。

第3番目の役員選出については、会長から候補の提案について会場に諮られ賛成を得た上で、理事会の承認を得た会長案を席上配布して審議され、原案通り選出された。(平成4年度日本工学アカデミー新役員表参照)

その他として、今回退任される役員に対し、何らかの謝意を表したいと会長より提案があり、日時、場所、方法等については会長に一任することで了承された。

以上で、14時15分第6回通常総会は無事終了した。

感謝状贈呈

引続き、平成3年10月に理事及び専務理事を退任された武田行松会員に感謝状および記念品、また、平成4年3月退職された傍島前事務局長に感謝状が贈られた。



司会をする桜井専務理事と議長に向坊会長



向坊会長から武田行松前専務理事に感謝状の贈呈

各委員会、専門部会の報告

司 会	専務理事	桜井 宏
ア. 委員会関係		
会員選考委員会	委員長	中川 良一
政策委員会	前委員長	今井兼一郎
国際委員会	副委員長	馬場 準一
広報委員会	委員長	山口梅太郎
イ. 専門部会関係		
材料専門部会	幹事	井村 徹
情報専門部会	部会長	小口 文一
バイオ専門部会	部会長	三浦謹一郎
地球環境専門部会	前部会長	杉本 正雄

報告会は、各委員長・専門部会の責任者により平成3年度の事業成果および平成4年度以降の計画についてそれぞれ報告が行われた。

事務局報告

桜井専務理事より、まず、平成3年中に開催された談話サロンの状況、賛助会員16社（別記参照）の披露等があり、更に海外等の来客の接遇、地方会員上京の際のサービス等を拡充するため事務所を9月末迄に都心に移転することについて説明があった。

休 憩 30分

特別講演

講 師 : 大来佐武郎氏

演 題 : 「地球環境問題と人類の将来」

時宜を得た講演内容で、出席会員も大いに感銘を受けた模様であり、質疑も活発であった。（聴講90名）（講演内容は追ってInformationを作成して配布の予定）。



特別講演：大来佐武郎会員

懇親会

懇親会は向坊会長の挨拶、今回副会長を退任された杉本正雄氏の乾杯で開催され、盛会裡に終了した。（参加者約70名）

日本工学アカデミー賛助会員名簿（入会順）

日本電気株式会社
住友電気工業株式会社
日産自動車株式会社
富士通株式会社
沖電気工業株式会社
株式会社熊谷組
トヨタ自動車株式会社
株式会社大成建設
鹿島建設株式会社
ソニー株式会社
西松建設株式会社
三菱重工業株式会社
株式会社日立製作所
三菱電機株式会社
国際電信電話株式会社
東日本旅客鉄道株式会社
（以上 計16社）

講演会—第43回談話サロン 「今後10年の科学技術政策18号答申を中心として」

日 時：平成4年3月23日（月）

場 所：弘済会館

講 師：大沢 弘之氏（科学技術会議議員）

企 画：日本工学アカデミー政策委員会

1956年科学技術庁、1969年科学技術会議創設、1971年5号答申（環境公害対策バイオ等）、1977年6号答申（国民生活、福祉、医療等）、1984年11号



答申（創造性、人間性、国際性重視等々）それぞれの将来ニーズ、環境に合わせて科学技術会議は答申を総理大臣に出してきた。今回は1990年6月「新世紀に向けてかちとるべき科学技術の総合的基本方策について」の諮問があり、この検討結果が18合答申として1992年1月24日総理大臣に答申された。第11合答申策定後7年間に国民意識は、物質的豊かさからゆとりと言う様な精神的な豊かさを求める様になっている。

経済成長を維持しながら広い意味の環境変化に対応する為、

- 生活と社会の充実を目指して、大学、国家試験、研究機関等の大幅な充実
- 基礎研究中心に、科学技術の活動の強化、知的ストックの拡大
- 地球環境問題、エネルギー問題など人類共通問題解決のための人材養成などのため
 1. 地球と調和した人類の共存
 2. 知的ストックの拡大
 3. 安心して暮らせる、潤いのある社会の構築

の3目標を掲げている。

この為に、政府の研究機関開発投資の拡充を図る、人材養成、大学・国立試験研究機関の研究環境整備を急務としている、と18号答申の主要目標を説明、更に重点施策として、

1. 科学技術と人間・社会の調和
2. 科学技術系人材の充実
3. 研究開発投資の拡充
4. 研究開発基盤の強化
5. 科学技術系人材の充実研究活動の活性化と創造性の発揮
6. 国際的な科学技術活動の強化
7. 地域に於ける科学技術の振興

を取り上げ、基礎科学の振興と重要分野の研究開発の推進のため基礎科学の振興といくつかの重要分野を挙げて、その研究開発の推進、人類の共存の為の科学技術、生活・社会の充実の為の科学技術の必要を強調している。大沢氏は答申を中心に今後十年の我が国の科学技術政策を述べられた。

これらの詳細はInformation を見るとして、図1、2、3、を注目されたい。

図1、研究開発投資水準は総額ではトップクラスであるが、政府研究開発投資の倍増、対国民総生産比1%が枢要の急務である。また図2は、GNPが予想の範囲で伸びる為に、2000年には30万人程度の研究者不足が予想されるとしている。さらに図3は、20歳代の科学技術についてのニュースや、話題に対する関心の急激な減少を示している。

重点施策の2. 科学技術系人材の充実の基本的条件として科学技術に対し夢と情熱を持つ若者の増加の重要性が改めて認識される、と結び会するものに多くの感銘を与えた。（文責 今井兼一郎）

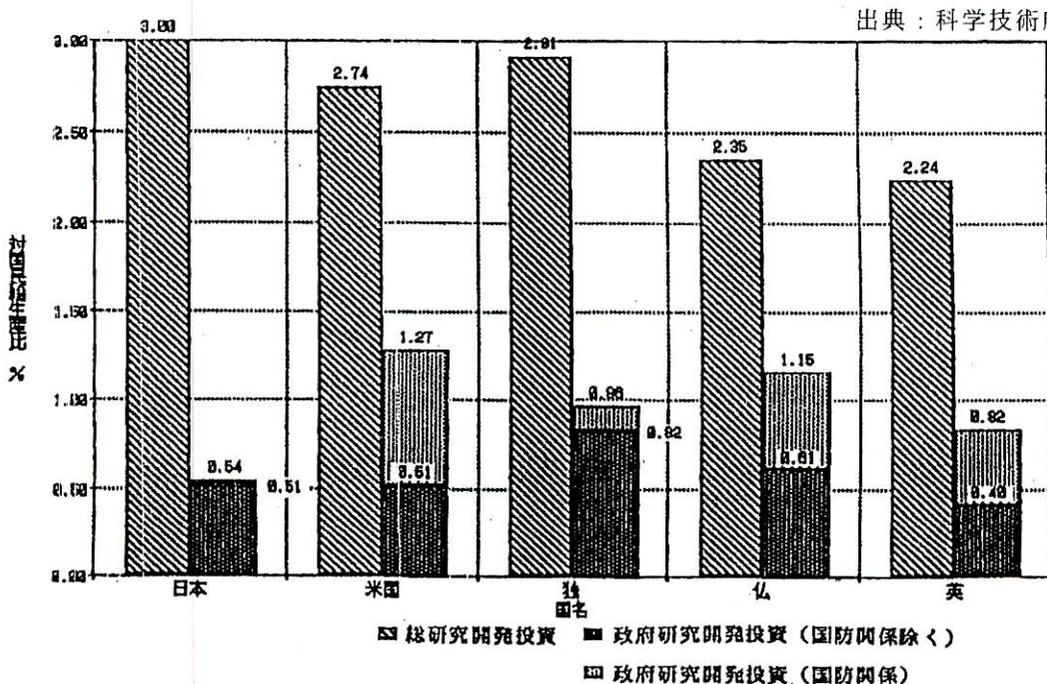
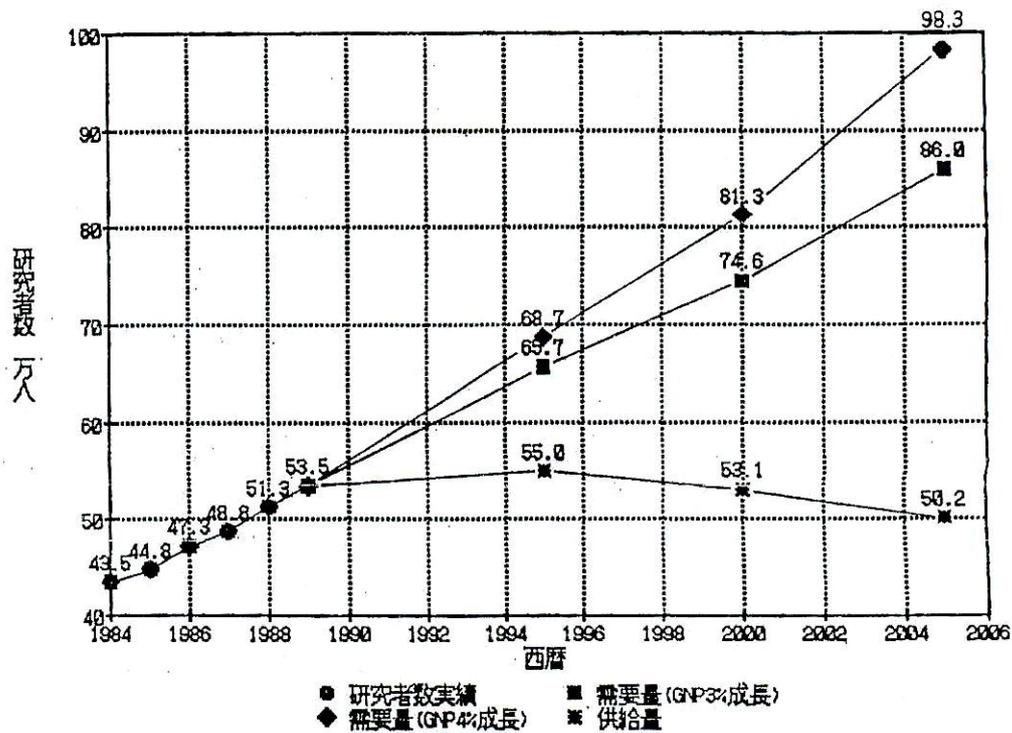
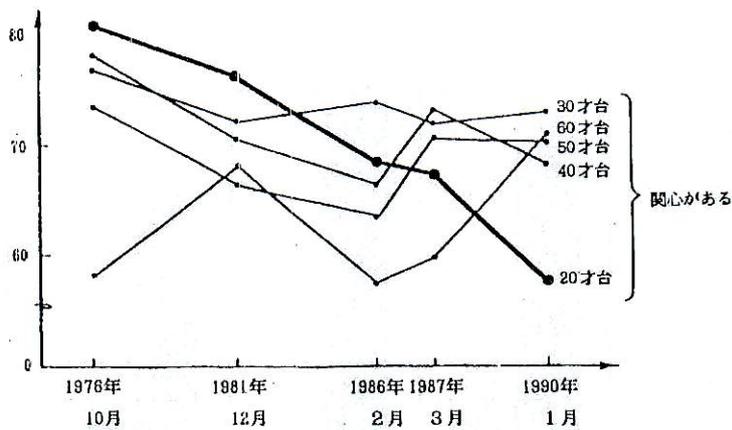


図-1 研究開発投資水準の国際比較



出典：基礎的先導的科学技术の推進のための研究人材に関する調査研究（平成2年度、科学技術庁）

図-2 研究者数の将来予測



(注) 関心がある：「大いにある者」と「少しはある者」の合計。

関心がない：「あまりない者」と「全くない者」の合計。

(注) 科学技術政策研究所において、総理府広報室「科学技術と社会に関する世論調査」等をもとに作成。

(出典) 科学技術政策研究所「NISTEP REPORT No.17 科学技術と社会とのコミュニケーションの在り方の研究」（平成3年3月）

図-3 「科学技術についてのニュースや話題」に対する関心の推移（男：年齢階層別）
－「関心がある者」と「関心がない者」の比較－

CAETS 総会参加報告

第9回世界アカデミー連会（CAETS）総会（Convocation）は1992年5月19日から22日までデンマークのコペンハーゲンで32ヵ国から128人の参加者が集まり開催された。今回の総会は日本工学アカデミーが正式の会員として参加する最初のものであり、本会からも向坊会長以下中川、中原両副会長、講師として招聘された岡村会員及び桜井の5人が参加した。

会議のテーマは「技術の将来」であったが、総会を企画したデンマークのアカデミーでは、人類の将来が経済、環境、保健と栄養、低所得国の開発に対する世論によって大きく影響される事から考えて工学や技術がより合理的な世論形成に寄与すべきでありCAETSの場を通じて人類のために技術が何を提供出来るか、そのためにはどんな技術が必要か、又その技術はどうすれば有効に使われるか、そしてその技術はどんな方向に発展させるべきかについて論じようとして、講演や、討論の場を用意していた。

先ずデンマークのアカデミー（ATV）会長 Erik B. Rasmussen 氏の歓迎の挨拶があってから議事に入った。

セッションはⅠ. 技術と生活の質（quality of life）、Ⅱ. 技術の枠組み、Ⅲ. 持続する技術開発の3つに分けられ、これらの前にWMO（世界気象機構、World Meteorological Organization、国連専門機関の一つ）の世界気象研究局長でパリのピエル&マリー・キュリー大学の教授でもあるPierre

Morel氏の「科学、技術と社会」と題する基調講演があった。この講演は人類の歴史を概観してから、その最後の僅かな部分でしかない、科学技術に基礎をおいた経済の発展と人口の爆発的増加が如何に地球や、地球上の各国の社会に影響して来たかを論じ、人口、資源、環境の面から地球は所謂成長の限界に近づいて居り、近視眼的に短期的に物を考え決定を行っている政治家や経営者に対して、技術面から長期的な判断の材料を提供して行くのが我々の責務であり、世界の将来については、Arthur C. Clarkeの「幼年期の終り」（1954、和訳1969）にある様な精神的満足に心の平安を求める社会か、Aldous Huxleyの「見事な新世界」（1932）に述べられている様な全人類に管理された幸福感を与える様な世界政府か、の様な両極端の見方があるがこの2人の著名な著者も成長の限界が見えて来た、現在の様な事態は予想していなかったと思うし、我々としては子孫がより健全な社会に住める様に、合理的判断が出来る手段を残す事が必要であるとの格調の高い講演であった。好意的な反応もあったが、発展途上国（マレーシア）からの出席者がこの基調講演の様な近未来の経済開発についての悲観的な物の見方を強調する事は人類の福祉には寄与しないのではないかと反論したのが印象に残った。

第Ⅰセッションでは米国アカデミーのRobert White会長の司会で、4つの講演があった。即ちフランスの国立農学研究所長のGuy Paillotin氏が「農業と食品連鎖」と題して農業食料事情を概観し、米国科学アカデミー及び国立研究評議会（NRC）の国際担当責任者であるJames B. Wyngaarden氏が「健康と技術」のタイトルでバイオテクノロジーの最近の研究動向と関連する規制、国際問題、特許、生産物の法的性格などについてまとめた。「環境-技術の機会」と題する講演はデンマークI. Kruger Systems社、上席副社長のGeorg Bang Jensen氏とShell International Petroleum社のMichiel Boersma氏の2人によりそれぞれリサイクル、廃棄物処理などの技術、経営問題とエネルギーの使用のパターンの変化とその環境への影響についての要約があった。

第Ⅰセッションの各々の講演はよくまとまって居り、有益なものではあったが、各講演間に脈絡がなく、又セッションのタイトルのQuality of Lifeと



総会会場となったEigtveds Pakhus



デンマーク工学アカデミー会長 Rasmussen 氏

の関連がはっきりせず討論も盛り上がらなかった。全体の構成に問題があった様である。

「技術の枠組み」と題された第ⅡセッションではスウェーデンのアカデミーのHans Forsberg 会長が座長となって3つの講演が行われた。先ず英国のコンサルタントで英国アカデミーの関係委員会の議長でもあるEdmund C. Hambly氏が一括して比較された事のなかった異質のリスクを同じ尺度で比較する方式と、その方式による比較表を「リスクの現実的評価」と題し、NAEの副会長で元AT&Tの財務担当副社長であったMorris Tanenbaum氏が、米国に於ける研究開発費支出の現状とAT&Tを例にして企業に於ける研究開発費支出決定のメカニズムを「技術への投資」と題し、更にドイツマックス・プランク気象学研究所長のReimar Lust氏が、基礎的な発見から実用化迄の歴史の例と欧州宇宙開発庁(European Space Agency-ESA)とを例にして研究開発のための組織論を「インフラストラクチャー」と題して話した。3人の話はどれも興味あるものであり又提供されたデータも面白かったがセッション最後の討論は質問的なものが多かった。

第Ⅲセッション、「持続する技術開発」は日本の向坊会長が座長となって、英国アカデミーのSir William Barlow氏の「コミュニケーションとモビリティ」と題した交通、通信の歴史の概観、最近の進歩などに加え、通信手段が進歩しても人と人との直接の対面のための交通の必要性は決して減少しないとの結論が提示され、次いで工学教育について若者の理工学離れが問題とする岡村総吾先生の講演と技

術者の教育は問題解決の能力を十分につける事が大切で、社会科学などの周辺学科の占める時間が多くなるのは問題とするデンマーク技術大学教授のJohn Villadsen氏の講演と続いた。最後に「人的要素と技術」と題し、フランスの元フランスカルボナージ社及びCDF 化学社の部長であり、また、フランス電力庁の局長でもあったフランス科学アカデミーのMichel Hug氏が原子力発電所を如何にして一般大衆に受け入れさせるかについてあまりフランス人らしくない講演があり更にストックホルム大学心理学教授とカロリンスカ研究所の心理学部長を兼ねるMarianne Frankenhaeuser女史による分子生物学の進歩が人間行動の理解に役に立つ様になって来た事などの講演で予定された講演を終った。

岡村先生の講演は内容ばかりでなく講演の態度にも日本人には珍しい程の余裕があり、大学入学年齢の人口変化の説明の中で丙午(ひのえうま)迷信の話がされた時などは万場爆笑させるなど好評であった。最後の討論も盛り上がり、望まれる技術者の姿についてもVilladsen氏の一人立ち出来る技術者と岡村先生のチームの一員として全体に寄与できる技術者との間に相当の意見の差もあり各国の文化や経済の背景と共に考えると面白いと感じた。

講演、討論の終了後今回の総会の議長を勤めたデンマークアカデミーの副会長であり又高名な気象学者でもあるAksel Wiin-Nielsen教授がこれからの世界に対する技術者の役割を各講師の講演内容を引用しながらまとめて終了した。なお5月19日夜の歓迎レセプションから5月23日の出発迄コペンハーゲ



第3セッション座長の向坊 隆会長

ンは、現地の人も驚く程の異常気象で毎日雲一つない好天が続き、加えてほぼ完璧なデンマークアカデミーの総会及びそれに伴うSocial activityのアレンジがあり、有益であるばかりでなく、極めて楽しい数日間であった。日本からの夫人同伴は岡村先生だけであったが、夫人の参加も全体で50名近くあり、レディプログラムはバス1台満員近かった由である。途中2日目(5月21日)の午後はデンマークの大企業であるビールのカールスベリー社の招待があり、参加者は同社に於けるバイオ研究の講義を聞く機会もあったが、話が専門的すぎてよく判らなかったとの声が大勢であった。



総会会長 : Aksel Wiin Nielsen
デンマークアカデミー副会長



講演 : 岡村総吾会員

Convocation の行われたEigtveds Pakhus (倉庫)も大部分の参加者が滞りし歓迎レセプションのあったAdmiral ホテルも昔の木造レンガ壁の倉庫の内部を近代的に改修したもので、コペンハーゲンの街全体が昔の建物の外観を生かしていた。夕食会のあった前の株式取引所も昔のままに整備された重厚な建物であった。

なおConvocation の前日にスイス・チューリッヒで来年9月に開催予定の第10回Convocation 準備のためのWorkshopがあり、又5月23日にはCAETS の管理理事会があったが、この内容については今号の切時間と、スペースの制約もあるので次号で御紹介する事にしたい。

なおこのConvocation の要約は本年10月早々に、また全部の記録はConvocation Report として本年末迄に出版される予定である。個人用コピーの申込みについては別欄の募集記事を御参照ありたい。

(文責 桜井 宏)

第9回CAETS 総会記録要約及び全文の申し込みについて

別欄記事にある様に世界工学アカデミー連合総会の要約が本年10月早々に、又、全記録が年末にデンマーク工学アカデミーから刊行される事になっています。日本のアカデミーには各10部宛送られて来る事になっていますが10部以上の分も締切迄に申し込みれば追加入手出来ますので御希望の方は8月15日迄に事務局宛お申し込み下さい。先方の頒布価格は

要約が50デンマーククローネ(約1050円)、全記録が200デンマーククローネ(約4200円)ですが、申し込まれた会員には要約は無料で、全記録の場合も申し込み数にもよりますが無料又は実費以下で頒布する予定です。

(事務局 TEL 03-3777-2941 FAX 03-3777-4941)

第3回日本・スウェーデン バイオプロセスエンジニアリング ワークショップ

日 時：平成4年2月24日（月）、25日（火）
場 所：麻布グリーン会館及びスウェーデン大使館講堂

バイオ専門部会では第3回日本・スウェーデンバイオプロセスエンジニアリングワークショップを平成4年2月24日（月）麻布グリーン会館および、2月25日（火）スウェーデン大使館講堂で都合2日間開催した。日本側からの9件、スウェーデン側から11件の講演発表があり、講演者を含め参加者は50名

であった。日本工学アカデミー会員は6名が参加した。今回は、ゲノム解析および酵素や生理活性物質の分離・精製プロセスに両国研究者の話題が絞られ、実りある研究講演会を持つことができた。

2月26日（水）には、箱根宮の下に場所を移してラウンドテーブルディスカッションを行い、両国研究者の次回のワークショップについて意見を交換した。これには日本側から5名、スウェーデン側から12名が参加した。（文責 遠藤 勲）

日本・スペイン国際シンポジウム —第7回国際技術交流フォーラム—

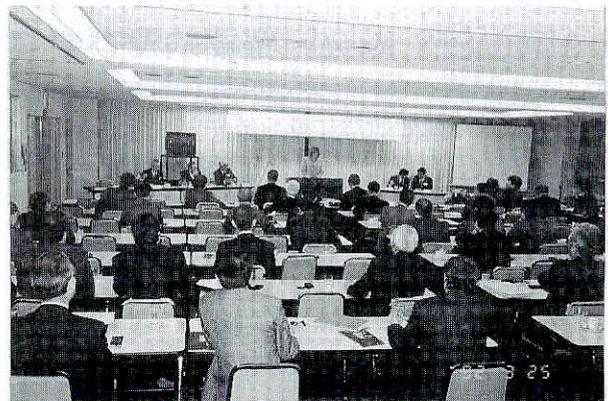
去る3月25日、西新橋の航空会館にて、第7回ITF（International Technology Forum）国際シンポジウムが、（財）日本産業技術振興協会と日本工学アカデミーとの共催で、スペインから4人の講師の先生方をお招きして行われました。このシンポジウムはスペインのゴンザレス首相が来日された折に、同首相とITFの猪瀬博会長との話し合いの中で発想され、今回実現の運びとなったものであります。

スペインはいま、1992年のEC統合、セビリア万博とバルセロナ・オリンピックなどで注目を浴びておりますが、同国の産業技術の分野でも、積極的な推進を計ろうとしております。このような折に、スペインにおける産業技術の特色や日本との協力関係について国際シンポジウムを開催し、相互理解を一層促進し、今後のより密接な交流の緒にしては、との趣旨でありました。以下今回のシンポジウムの概要を報告いたします。

まず、産業・通商・観光省の産業次官のエウヘニオ・トリアーナさんよりスペイン政府の技術政策全般についての説明が行われました。応用性の高い技術分野や国際協力の可能な技術分野等をはじめ有望な産業分野を国として設定し、国内での税制優遇措置、補助金等の支援を行うなど、技術立国を目指す積極的な姿勢が感じられました。またECとの関係では、エスプリやユーレカで積極的な活動を展開し、さらには宇宙関係のESAではその中心的な役割を担っていることを力説されました。この分野では日本の関連技術も積極的に活用されているとのことであり、航空・宇宙産業にけるスペインの意

気込みが印象的でありました。

バルセロナ・デザイン・センターのマイ・フェリッップさんは女性講師であり、かつスペインの伝統芸術を現代に活かしたデザインのご講演ということで、ITFの今までに無かった試みとなりました。デザイン振興を目的とした上記センターの理事をされており、デザインのもつ意義について改めて啓発されるお話を承ることができました。ダリやピカソ、ガウディ等の偉大な芸術家を生んだ伝統と芸術の国スペインの歴史を踏まえた上で、スライドを用いて様々な工業デザインを紹介され、それぞれの時代の政治・経済・社会の枠組みの中で、デザインの役割に何が要請されてきたかを振り返り、今日のデザインの持つ意義について語られました。デザインを単に商品戦略の一環といった二義的なものとして捉えるのではなく、デザインが商品の機能を定め、或いはテーマに合った空間を創り出す、また自然の生態系の中で環境保護を前提として均衡を創出するなど、デザインはより積極的な意味で重要な役割を果たすことが出来ると指摘されました。デザインが技術を



先導しうるといふ力強いフェリップさんの御講演に、啓発される思いでありました。

ジェイ・ウリアック社のホァン・ブラデさんのご講演は、医薬品とファイン・ケミカルの分野におけるスペイン全般のご紹介となりました。スペインの医薬品産業においては、従業員が500人以上の規模の会社は5社しかなく、全体として比較的中小の企業が多いということでした。他のヨーロッパ諸国とは違った産業構造であります。これは内戦を含むスペインの持つ政治・経済・社会の歴史的な背景によるようです。研究分野に関しては、リボソーム、モノクロナール抗体、バイオ・センサー等、先端技術分野として我が国でも馴染みの深いものを対象としております。企業規模の現状からすれば、外国企業との提携は重要な課題と思われれます。ブラデさんは冒頭でスペインに進出している日本の企業名をあげ、また最後には、日本との技術協力を呼びかけておられました。

コロメール・ムンマン社のホァン・ヴィララッサさんが携わっておられる皮革産業技術のご講演については、この分野は日本の現状よりかなり進んでおり、最も自動化の難しい伝統産業に最先端技術を応用された事例ということもあって、非常に興味深いものがありました。材料が柔らかく、不均質・不定形で、かつ色彩や感触など人間感覚的要素もあり、取扱いに技術的困難さがあります。これらの技術的課題を解決していくために、例えばカラー・マッチングにはスペクトロ・フォトメーターを使い、最終の評価・判断の部分にも高度の自動化装置を取り入れています。またディスタッキングにはマシン・ヴィジョンを用い、さらにシステム・アップの為に、

エキスパート・システムやニューラル・ネットワークを導入中とのことでした。この様な皮革産業における、製造プロセスの真の自動化を図るためには、まだまだ多くの課題を残していますが、この産業分野は日本がスペインから大いに学ぶ処の多い一つと言えます。

今回の国際シンポジウムは、出席者は約70名でありましたが、熱心な討議も盛んに展開され、またシンポジウム終了後のレセプションには多数の方々に参加されて盛会のうちに終了することができました。日本・スペイン両国にとって大変印象深い、良き交流の機会となったことと信じます。

最後になりましたが、今回のシンポジウム開催にあたり、いろいろと貴重なご助言を賜り、またお忙しい中をレセプションにもご参加頂き大変熱心なご支援を賜ったスペインのオヤルサバル駐日大使に、また準備段階の当初から少なからぬご協力を頂いた東京大学総合文化研究科のセイビア・ブルダ氏に厚くお礼申し上げます。ご講演頂きましたスペインの4人の講師の先生方は勿論であります。ITFの猪瀬会長・吉川企画委員長をはじめ軽部・平沢両企画委員の先生方には本シンポジウムの企画に加えて、各講師の先生方とのディスカッサントとしても内容豊かなご発言と、行き届いたご配慮を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。日本工学アカデミーの方々には多数ご参加下さり、このシンポジウムを盛り上げて頂きました。特に、日本スペイン協会の小林宏治会長には、お忙しいなかを貴重なお時間を割いてご参加下さり、またレセプションでもご挨拶を頂きましたこと、重ねて厚くお礼申し上げます。

(文責 (財)日本産業技術振興協会)

国際会議 「1992年アジア-太平洋生物化学工学会議」

日 時：平成4年4月12日-15日

場 所：パシフィコ横浜（横浜市）

化学工学会が韓国および米国化学工学会と主催し、日本工学アカデミーがバイオ部会の行事として共催した1992年アジア-太平洋生物化学工学会議は本年4月12日より15日まで、パシフィコ横浜において開催された。第1回を1990年に慶州において開催したものの第2回目の会議であるが、バイオプロセスの工学的研究を基礎から応用までカバーする会議で、アジア-太平洋地域の研究者の研究交流の場として2年毎に開催が決まっているものである。

今回の会議の参加登録者は417名（うち同業者15名）で、そのうち外国からは韓国（57）、中国（27）（うち台湾（9）を含む）、アメリカ（14）、シンガポール（7）、インド（5）、ロシア（4）、オーストラリア（3）、イギリス（3）、ドイツ（2）など16ヶ国から約130名の参加があった。会議の内容は、12日（日）は午後から登録とウェルカムレセプションを行い、13日（月）の午前に関開式とプレナリー講演を行い、研究発表は13日の午後から11のセッション（表参照）に分かれて行われた。発表件数は230件、うちオーラル発表98件であった。また、

各セッションの始めにはキーノート講演を設けた。講演と研究発表の内容はプロシーディングズ、“Biochemical Engineering for 2001”としてSpringer社から出版されている。

プレナリー講演では、まずHumphrey教授（ペンシルヴァニア州立大学、1991年AIChE 会長）による“Biochemical engineering—past, present, future”と題する講演が行われた。生物化学工学の歴史を振り返り、現状のトピックスを紹介し、将来への展望を述べた格調高い講演であった。生物化学工学のパイオニア的なテキストである“Biochemical Engineering”（東大出版会、1965、1973）の著者である合葉修一先生、Humphrey先生、Millis先生の30年前の写真もスライドで示され、満場の拍手を受けたユーモアある講演であった。次いでRogers教授（オーストラリア、ニューサウスウェルズ大学）による“Strategic planning and new directions in biochemical engineering”と題する講演が行われた。ご自身の研究から微生物*Zimomonas mobilis*を用いた酵素の生産、バイオ生産物による蚊の制御などアジア太平洋地域に関係する生物化学工学の問題提起をされた。三番目のプレナリー講演として山田秀明教授（京大名誉教授）は“New biocatalytic functions of microorganisms and their industrial applications”と題して先生の研究された発酵による物質生産および工業プロセスを紹介された。

研究発表では、最先端の話題と共にアジア—太平洋地域特有の植物の利用、環境への対応など地域の特有の話題も提供された。どのセッションも参加者の関心をよび、会場の座席が不足した程であった。生物化学工学がバイオテクノロジーの展開と共にますます重要になっていくことを示しているものということができよう。

一方、期間中レディースプログラムで横浜市内と三溪園の見学、エクスカーションで鎌倉およびキリンビール工場見学を企画し、どれも好評であった。二日目の晩餐会では、上記の合葉、Humphrey、Millisの3先生の功績に対して表彰を行った。

この会議は最初に述べたようにアジア太平洋地域の生物化学工学の研究者の交流を目的としたものであるが、中国、インドやロシアなどからも多数の参加者を得たことは、会議を企画したものにとって誠にうれしいことであった。特に、モスクワからシベリヤ鉄道でハバロフスクへ5日かかりで来て、新潟まで飛行機、さらにJRで横浜まで来た国立モスクワ循環器研究所の3人の研究者に驚くと同時に、日本への興味も大きいのだと感じた次第である。

尚、この次の第3回の会議は1994年6月にシンガポールにおいて開催されることになった。

（文責 古崎新太郎）

セッション名と発表件数

セッション	オーラル	ポスター
1. Gene and Protein Engineering	7	8
2. Enzyme Engineering	7	12
3. Fermentation Technology	8	22
4. Plant Cell Culture	8	13
5. Animal Cell Culture	8	9
6. Bioreactor	15	17
7. Bioseparation	15	18
8. Biosensor and Biomedical Engineering	7	4
9. Process Modelling and Control	8	6
10. Bioresources and Food Engineering	7	9
11. Environmental Engineering	8	12
合 計	98	130

講演会のお知らせ

1. 演 題：「フロン問題解決のための今後のシナリオ」
日 時：平成4年6月17日（水）14：00～
場 所：九州産業技術センター会議室
講 師：内野哲也（旭硝子株式会社常務取締役
開発本部長）
主 催：日本工学アカデミー地球環境専門部会、
九州産業技術センター

2. テーマ：「ボーダーレス時代の学術情報」
日 時：平成4年7月6日（月）13：00～16：30
場 所：東京大学山上会館 大会議室
主 催：学術情報センター
〔プログラム〕
挨拶 猪瀬 博（学術情報センター所長）
講演 「相互依存の経済学」 稲田献一（大阪
大学名誉教授）
「科学技術会議－第18号答申の意味する
もの」 森 亘（科学技術会議議員）
「技術革新と学術情報」岡村総吾（東京
電機大学長）
（詳しい御案内のパンフレットをお届けします）

事務局からのお知らせ

平成2年9月29・30日の両日、神戸国際会議場において開催された日本工学アカデミー第2回国際シンポジウムのプロローグがこの程やっと出版の運びとなり、過日会員のお手許にお届けいたしました。発送の過程での本の損傷や、落丁・乱丁などございましたら事務局まで御連絡下さいますようお願い申し上げます。

石 崎 貞 正 会 員
九州産業大学、理事長
平成4年5月1日逝去 享年78才

謹んで御冥福をお祈りいたします



編集後記

第6回通常総会は、去る5月15日多くの会員の参加を得て無事終了しました。

今年度は、賛助会員制度の導入によって増強された財政基盤を活用して、従来からの活動を継続すると同時に、国際交流活動をより充実し、今後の企画業務の拡充を図れるようになったことは喜ばしい事です。一方、9月中に、都心部の神田の岩本町に事務所を移転することになりました。多少なりとも来日する客員や、上京される地方会員のサービスに役立てればと思います。

日本工学アカデミー創設以来専務理事として当会の発展にご尽力された武田行松氏が交替され、また事務局長として活躍された傍島忠義氏が、3月31日付で退職されました。草創期の困難な時期を乗り越えて、今日の当アカデミーの発展に寄与されたお二人のご苦勞に、心から感謝の意を表したいと思います。

ここに、ニュース第26号を発刊する運びとなりましたが、今後、ますます内容を充実して、お届けできるように努力する所存です。

(編集子)